

第39回国際学生セミナー「東アジアを考える」に参加して

経営情報学部3年 村杉 契祐



私は、2012年11月24日(土)～25日(日)1泊2日の日程で公益財団法人大学セミナーハウス(八王子セミナーハウス)が主催する第39回国際学生セミナー「東アジアを考える」に参加した。参加するきっかけは、私が所属している金ゼミの指導教官である金美徳教授が企画委員として講演やディスカッションのご指導をされることだったので、お誘いを受けたからだ。国際学生セミナーの趣旨は、「いま東アジアは少なくとも経済面では世界の中心の一つになり、日本・韓国・中国・台湾に生まれた人々は日常的往来が茶飯のことにしている。そこには、20世紀前半の歴史が遺した取も遺っているが、他方では史上初めて、人々が同じ地域に暮しているという実感とお互いへの関心を持ちだしている。このセミナーでは、この東アジアという地域がどのようにして生まれ、今後どのような問題に直面するだろうかという問題を、長い歴史的な視野から共に考えてゆきたい。」というものであった。参加者は、東京大学16名、多摩大学7名、早稲田大学3名をはじめ20大学から54名であった。

私は、このセミナーに今、日本社会に求められているグローバル人材とはどんなものか、また他の大学生や留学生とともにディスカッションして何かしらの見聞を広めたいという一心で臨んだ。

セミナーの初日は、「東アジアを考える」をテーマに教授陣による講演とセッション毎のディスカッションであった。開会に際しては、荻上紘一館長(大妻女子大学長)の開会の辞があった。基調講演は、東京大学の三谷博教授(企画委員長)が、「アジア概念の発明」をテーマに行った。その後、多摩大学の金美徳教授が「現代東アジアの経済依存関係」、早稲田大学の李成市教授が「東アジアにおける漢字文化の伝搬と受容」、立教大学の上田信教授が「中国の風水・日本の水土―地域からの発想」、東京外語大学の小松久男教授が「2つのユートピア：ロシア・イスラーム・東アジア」というテーマで提題講演が行われた。

全ての講演が終わった後、各セッションに分かれ、各自の問題意識を兼ねて自己紹介を行った。その後は、全員で懇親会という流れだった。

2日目は、セッション毎に各テーマに対してディスカッションを行

い、それをまとめて全体会議で発表する準備を行った。私は、金教授の経済セッションであった。ここでは、アジア各国が持つそれぞれの強みは何か、またその強みをいかに組み合わせてアジアの経済発展に貢献するかについてディスカッションし、まとめあげた。印象深かったことは、「日韓海底トンネルと中韓海底トンネルは必要か」という議論であった。各々が意見を出し合中、金教授が「本音で話そう」と仰ったことで流れが変わり、最終的に私を含めたメンバーの半数が経済的には賛成だが、政治情勢を考えると難しいというシビアな結果となった。何よりも中国・韓国・台湾の留学生が、政治情勢も大事だが、経済関係の強化の方が両国にとってより大事だという意見が最も印象に残った。このように他の大学生や留学生たちと本音で話せたという貴重な体験が何よりの財産となった。最後は、各セッションの代表者の発表と、教授陣によるパネルディスカッションで国際学生セミナーは閉幕した。

国際学生セミナーで学んだことは、小さな単位の交流の大切さである。特に同年代のアジアの人々との交流は、貴重であり、重要であるということをもっと感じた。グローバル人材になるためには、このような積み重ねが大切である。また、アジアの留学生は、思った以上に冷静で、反日デモなどの報道はアジアの一側面でしかないということが分かった。今後は、アジアを多方面から捉えることによって、より客観的なアジア観が必要だということを思い知らされた。今回のこの貴重な体験と気付きは、今まさに始まっている就職活動のみならず、自分の人生においてもフルに生かしていきたい。



右端が懇親会での私、他多摩大生4名

経営情報学部 2年 古西 政樹



天王洲のビル群を抜けるモノレール（天王洲アイル駅付近にて）



羽田空港に向かう直通先の京成車両（鮫洲駅にて）



羽田空港に向かうエアポート快特（鮫洲駅にて）

東京オリンピックが始まる直前の1964年9月に開業した東京モノレール。当時の羽田空港と都心（浜松町）を結ぶ唯一の路線として開業した。当時は、浜松町～羽田空港間には途中駅がなかった。オリンピック開催期間中はその利便性から経営面は順調な出だしとなったが、オリンピックが閉幕すると、当時航空輸送が一般的ではなかったために、乗客は減少し、経営が悪化した。そのために、日立運輸などが東京モノレールと合併し経営の再建を図った。

一方、京急は羽田空港に対しては苦渋をなめ続けさせられていた。1956年に初代の羽田空港駅を開業する。しかし駅の位置は、現在の穴守稲荷～天空橋駅の間にある海老取川の手前に位置していた。そのため、羽田のターミナルまではかなりの距離があった。原因は羽田空港に進駐していた米軍の存在だ。1945年に日本が敗戦すると、米軍の飛行場を拡張するため、路線が短縮された。1956年に延伸されたが、その距離はわずか300mほど。海老取川を越えることはできなかった。1990年に入って、羽田空港が沖合移転に伴い、ようやく海老取川を越えることができるようになる。1993年に現在の天空橋駅に羽田駅を開業。1998年には現在の羽田空港まで延伸し、直通運転をすでにしていた成田空港に「エアポート快特・特急」で結んだ。2001年には横浜・川崎方面からの羽田空港直通列車の運行が開始され、羽田空港への輸送が強化された。

京急が羽田空港に参入したことで、乗客の増えたモノレールは再び減少方向になった。浜松町駅のJRの乗り換えの不便さを解消するために2002年にJR東日本がモノレールの株の大部分を取得。浜松町駅の改修を行い、乗り換えの利便性を図った。さらに2004年には羽田空港駅を羽田空港第1ビル駅に改名したうえで、羽田空港第2ビル駅までを延伸開業し、羽田空港内の利便性を向上させた。

現在、京急・モノレール両社ともに始発駅から空港まではノンストップで運行される種別があり、停車駅削減による時間の短縮の競争は頭打ちになっていると考えられる。これは、京急が空港に乗り入れたことによる競争の結果であり、都心方面への乗客には非常に便利な種別である。今後は京急では横浜・川崎方面からの列車があるが、モノレールはそれがない。そのため、途中駅の天王洲アイルからの空港への利用客が今後の鍵となるのではないだろうか。天王洲アイル駅はりんかい線の乗換駅で、りんかい線は埼京線に直通運転しており、渋谷・新宿・池袋などの利便性が高い。そこからモノレールを利用させるようにすることが、今後の鍵になってくるのではないだろうか。

ビデオジャーナリストゼミ 発

多摩ニュータウンへの “遠い道”

経営情報学部 3年 五十嵐 大喜

「郊外の洒落たニュータウンに住む“翔んでる妻たち”の不倫ということばかりが話題になったが、私が描こうとしたのはそういうことではない。ニュータウンという時代を映す鏡を通して、豊かになるとはどういうことか、そこでの家族とはあるいは地域とはということを見つめようとしたのだ…」

「ウルトラマン」生みの親のひとりでもあり、「キン妻」という言葉が生まれ一大センセーションを巻き起こした「金曜日の妻たちへ」（1983年、TBS）や「毎度おさわがせします」（1985年、TBS）など、時代をリードするテレビドラマを数多く生み出した飯島敏宏氏の静かに語る声が教室に響いた。プロジェクトゼミで実現した「飯島敏宏監督を囲む会」でのことだった。

私が学ぶ地元、多摩地域で大きなテーマとなっている「多摩ニュータウンの再生」に関心を抱いて企画として取り組めないかと考えはじめたころ「ホームカミング」という映画に出会った。かつては人々のあこがれの街でもあったニュータウンが少子高齢化の波に押されて「高齢者の街」となってしまった。その街に活気をとりもどそうと、定年を迎えた高田純次演じる主人公が地域の祭りを盛り上げるために奮起するという人情ドラマである。この「街と人生再出発の物語」は町田市の住民延べ1000人がエキストラとして協力して出来上がった映画でもある。その映画の監督が飯島氏だった。

「多摩ニュータウンの再生」をテーマにするなら飯島氏の話を書かなければならない。そんな思いつめた気持ちで氏に会いに行った。そこから実現したのが「飯島敏宏監督を囲む会」だった。

昭和31年に大学を卒業してTBSに入りディレクターとしてのスタートをきったこと、木下恵介プロダクションでドラマ制作者として実績を積み「木下プロ」の社長、会長までつとめたこと、私のあこがれたウルトラマンシリーズ制作の裏話など。自分史を語りながら戦後のテレビドラマの変遷、そこでの人々の暮らし、特に「住まいと地域」という切り口で人間を見つめる目、そしてなによりも制作者としての情熱。感動し、触発されたことを挙げればきりが無い。しかし、いちばん大事なことは時代と人間をどうとらえるのかということだった。

建物の老朽化、年寄りばかりの街…。これが高度成長期に東京のベッドタウンとして人気を博し、先端をゆくモダンな住宅として「羨望」の的となった、さらに時代のライフスタイルまでも創った多摩ニュータウンの現在の姿だ。この「多摩ニュータウンの再生」を、私の企画でどう描くのか。

「五十嵐は発掘した素材をどうまとめるのだ！君のメッセージはなんだ！」

教室では先生の激励まじりの厳しい叱咤が続く。

「飯島氏を囲む会」は実現させた。それで少しばかりの自信も芽生えた。しかし、まだまだ「多摩ニュータウン」への道は遠い。



飯島敏宏監督を囲む会

プロジェクトゼミ「メディアを創る」ではビデオ、音声メディアなどの企画、取材、制作に取り組んでいる。情報の「発信者」として誰もがメディアの主役になれる時代の挑戦だ。現在、男7人、女1人の「8人の侍」が奮闘中。夢は大きくビデオジャーナリスト。その取材、制作現場からビビッドなレポートをお届けする。

アキバ発、 挫折と試練の向こうに

経営情報学部 4年 中川 健人

秋葉原の交差点に立つと子供のころの思い出が懐かしくよみがえる。いまはパソコンや家電量販店のビルが林立する街になっているが、私が父に手を引かれて通ったころの秋葉原は小さな部品や工具類を並べる店がいっぱい連なる不思議な場所だった。

ジャンク屋。何に使うのかもわからない部品を売る店を大人たちがそう呼んでいることを知ったのもその頃だった。父の買い物に付き合った後、ご褒美に近くの交通博物館に連れて行ってもらうのも楽しかった。その秋葉原はアキバへと変貌を遂げる。

アニメにゲーム、コスプレ、メイド喫茶の街としても知られ休日には若者であふれる。歩行者天国で賑わう交差点に25歳の青年がトラックで突っ込み、ナイフで通行人を次々に刺すというショッキングな事件が起きたのは2008年6月の日曜日のことだった。

こうした「秋葉原」の変容を自分史と重ね合わせてビデオ化しようと企画した。昔からの変遷を知る秋葉原電気街振興会の方へのインタビューも交えながら、長い間見つめてきた秋葉原は自分にとってどのような場所であるのかを描こうと考えた。しかし通えば通うほど「秋葉原」が語りかけることの膨大さに戸惑うばかりだった。教室で学んだ「現場に立つ重さ」が身に染みてわかった。

苦しんだといえば2年生の時の企画を思い出す。自分の趣味でもあるアニメをテーマに「夢に挑戦するアニメーターは、いま」という企画を立てて録音構成の取材に挑んだ。しかし、学生が取材したいという要望を受け入れてくれるところなど簡単には見つからない。伝手も何も無い10社以上のアニメ制作会社や数校の専門学校に「お願い状」を書く日々が続いた。挫折の連続で暗い気持ちにもなった。そんな時だった。「壁にぶつかることが大事なのだ。社会に出たら思うようにいかないことばかりの毎日だ。いま君はかけがえのない経験をしているのだ！」と木村先生から叱咤されたのは。そしてついに世界の手塚治が創設した「虫プロダクション」への取材の風穴があいたのだった。感動！続いて秋学期には「守れ！日本のアニメ ～日本のアニメ文化振興のために～」と題して文化庁の担当者へのインタビューも実現した。何かを創るということは壁にぶつかることなのだ、だから挫折は怖いものではないということを書いた。これから社会に出ていく私のいまの自信のすべてはこの「挫折の日々」の経験にあるといっても過言ではない。

そして秋葉原。ロケ取材した折角のビデオ映像が、なんと保存していたメディアがクラッシュして消えるという災難に！残っていたiPhoneの写真構成でなんとか完成目指して、いま最後の仕上げに入っている。いやはや私の試練に終わりは無い。



駅から見た秋葉原の様子



多摩大学グローバルスタディーズ学部 (SGS) と私

グローバルスタディーズ学部 2年 酒向 杏沙

多摩大学グローバルスタディーズ学部に入学者、一番初めに行ったことが、私にとって初めての TOEIC 試験を受けたことだった。SGS では、TOEIC 試験の結果によって必修クラスが振り分けられるため、重要な試験なのである。しかし、私はとくに対策も立てずに試験に臨んだため、当然、結果はひどいものだった。それでも私はあまり危機感を感じずに SGS での生活をスタートした。

そんな私を変えるきっかけとなったのが、1年次の必修科目であった英語教育プログラムの履修だった。このプログラムを受けることによって、私は英語を学ぶことの楽しさを知った。英語を学ぶことで、母国語以外で自分の意見を表現でき様々な人に自分の意見を伝えられ、英語で扱われた本やテレビ等の情報から知識をつけることができ視野や興味関心が広がるのが楽しく感じた。SGS に入学するまで英語はコミュニケーションツールではなく語学だと感じていた私にとって、この経験は英語を学ぶことは屈辱なことだという価値観を払拭するきっかけとなった。それから、授業や課題に真剣に取り組み、TOEIC 試験対策もするようになった。英語でプレゼンテーションすることや文章を書く課題に取り組むのは大変だけれど、英語の基礎知識をつけることができるだけでなく、相手に自分の意見をどうすれば理解してもらえるか考える力をつけることができた。また、課題をやり終えたときの達成感や試験結果などは、私に自信を与えてくれた。

2年次では、多摩大学両学部と多摩大学大学院が共同して現代社会の抱える問題に取り組むインターゼミに参加した。問題解決のために現地調査を行うことや参考文献を読むことで、問題解決の手段は多くあることを感じただけでなく情報を自ら取りに行くことの必要性を感じた。また、インターゼミを通して多くの国内企業が海外へ事業展開している状況を知り、英語を学ぶことやグローバル人材になることの重要性を再確認した。

SGS では少人数クラスで授業が展開されるため教授の指導がきめ細かく、学生一人ひとりに対して熱心に指導してくれる。私も、多くの教授から親身な指導をうけ、人間関係を築くことの大切さを感じた。また、SGS で大切な仲間に出会い、学生生活の思い出を沢山つくることもできた。仲間と一緒にいることの喜びを感じ、遊びの計画を立てるために様々な分野に興味を持ち、行動力をつけることができた。以前の自分ならば、人との関わりを持ち自分の行動範囲を広げることは考えられないことだった。

自分の視野を広げるためには、小さなことでも何にでも興味関心を持ち、自ら行動していくこと。何かに挑戦すると、成功したか失敗したかに関わらず達成感や自信が得られること。人と人とのつながりには喜びがあること。SGS はこれらを私に教えてくれた。残りの SGS での生活も、自分の可能性を信じて挑戦する意識や人との関わり大切さを忘れずに過ごしていきたい。



2012 年度バドミントンサークル新入生歓迎会



SGS の友人とライブ会場にて